

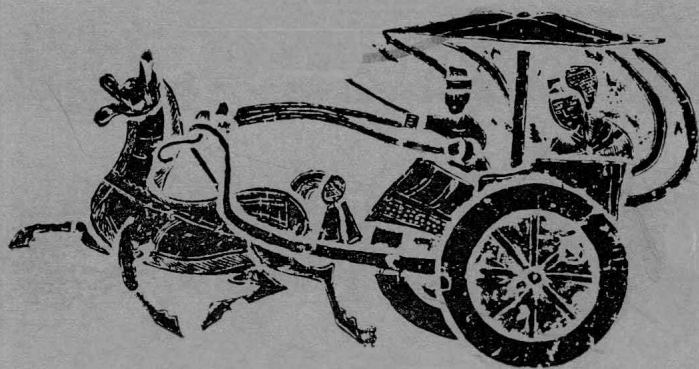
中国の故事名言

中国

監修／松枝茂夫・竹内好
編／和田武司・市川宏

中国の故事名言

中国の思想 別巻



中国の故事名言 『中国の思想』別巻

昭和四十一年四月十日 発行

五八〇円

編者 和田武司

発行者 徳間康快

印刷 図書印刷株式会社
製本 大口製本印刷
表紙布 望月株式会社
製函 岡本紙器株式会社

発行所 経営思潮研究会
発売 徳間書店

東京都港区芝新橋4の10
電四三四・六一九一

落丁乱丁本はお取替えいたします

検印廃止

まえがき

中国の古典は、長いあいだ、われわれ日本人の教養の根幹となってきた。今日、われわれが何気なく使っていることばのなかには、中国の古典を出典とするものがすくなくない。中国の古典は、いわゆる故事成語、あるいはごく短い引用句のかたちで現在われわれの生活のなかに生きている。これらを整理して捉えなおすことによって、中国の古典は、われわれにとってより身近なものになるのではなからうか。

本書は『中国の思想』全十二巻にもとづき、代表的故事成語・名言をえらびだし、解説を加え、出典個所を示したものである。『中国の思想』の索引を兼ね、同時に人名小事典・年表・地図を付し、ハンドブックとしても役立つようにつとめた。

本書によって、『中国の思想』が活用され、中国の古典思想が、より生活に密着していかされるならば、さいわいである。

『中国の思想』刊行委員会

例言

一、Ⅰ故事成語およびⅢ人物小事典は、全体を五十音順に排列した。Ⅱ諸子名言は、書別にまとめた上で五十音順に排列してある。

一、Ⅰ・Ⅲの各項目末尾に、たとえば孟子とあるのは、「中国の思想」の「孟子」七八ページの意味である。Ⅱの場合は書別に編集したので、書名にかえ篇名を掲げた。たとえば孟子の部に、告子とあれば、「孟子」告子篇二四一ページを意味する。Ⅰ・Ⅲは該当する訳文、Ⅱは同じく読み下し文のページ数を示す。なお、Ⅲの人物について、たとえば「孟子」中の孟子、「論語」中の孔子などはページ数を掲げていない。また、その人物がたてつけに登場する箇所は孟子とのごとく記した。

一、各項の本文中の*印、各項末および（ ）内の印は、本書中の参照項目を示す。

一、人物小事典には、主要国名をも採録した。

一、巻末に年表及び地図を付した。

装幀 上口睦人

目次

I 故事成語

イ衣食足りて礼節を知る……………	二	迂直の計……………	一七
異端……………	二	怨みに報ゆるに徳をもつてす……………	一八
一毛を抜いて天下を利するも為さず……………	二	工郢書燕説……………	一八
一陽来復……………	三	遠交近攻……………	一九
一を聞きてもつて十を知る……………	三	鵠雛は腐鼠を求めず……………	一九
鷸蚌の争い……………	四	才尾を塗中に曳く……………	二〇
寿ければ辱多し……………	五	温故知新……………	二二
殷鑑遠からず……………	六	力顧みて他を言う……………	二三
ウ魚の樂しみ……………	六	蝸牛角上の争い……………	二三

確乎不拔……………三
 獲麟……………二四
 餓虎の蹊に当たる……………二四
 和氏の璧……………二五
 華胥の夢……………二六
 臥薪嘗胆……………二七
 合從連衡……………二八
 鼎の輕重を問う……………二九
 株を守りて兔を待つ……………三〇
 管鮑の交わり……………三〇
 干禄……………三一
 キ木に縁りて魚を求む……………三三
 杞憂……………三三
 朽木糞牆……………三三
 玉卮、当なし……………三四
 ク愚公、山を移す……………三五

君子は庖厨を遠ざく……………三六
 君子豹変す……………三六
 ケ啓発……………三七
 形名參同……………三八
 逆麟……………三八
 兼愛……………三九
 コ肯綮に当たる……………四〇
 巧言令色……………四〇
 恒産なければ恒心なし……………四一
 浩然の氣……………四一
 行藏……………四二
 吳越同舟……………四三
 狡兔三窟……………四三
 虎視眈眈……………四四
 五十步百歩……………四四
 古人の糟魄……………四七

渾沌、こんとん
七竅に死すしちきよう……………哭

サ三舎を避く…………… 兇

三人市に虎をなす……………五〇

シ指し掌しょう……………五二

「士は己おのれを知る者のために死す」……………五三

「子は生臣となれ、忽、死臣とならん」……

死馬の骨を買う……………五四

車魚の嘆……………五五

柔よく剛を制す……………五

出藍の誉れ……………五六

春秋の筆法……………五七

常山の蛇勢……………五

助長……………五九

而立……………五九

唇齒輔車……………六〇

「臣に屈して天下に勝つ」………

又過ぎたるはなお及ばざるがごとし……………六一

セ性善・性悪……………三

跖せきの狗いぬ、堯ぎょうに吠ほゆるは、

堯を賤しむに非ず……………三

先覺者……………六四

千万人といえどもわれ往かん……………六五

ソ壮士ひとたび去つてまた還らず……………六五

造次顛沛……………六六

宋襄の仁……………宅

東條 脩……………六

夕大義、親を滅す……………六九

大器晩成…………… 充

太公望・・・・・・・・・・・・七

大道廃れて仁義あり……………七

多岐亡羊……………七二

多錢、善く買う……………七二

蛇足……………	三	八背水の陣……………	三
断金の交わり……………	三	莫逆の友……………	三
簞食瓢飲……………	三	始めは処女のごとく、 終りは脱兎のごとし……………	四
チ知音……………	四	反問……………	五
朝三暮四……………	五	反壁……………	五
テ庭訓……………	五	ヒ尾生の信……………	六
天網恢恢疏にして失わず……………	六	匹夫の勇……………	七
天籟……………	六	貧窮なれば父母も子とせず……………	七
ト道聴塗説……………	六	フ風馬牛……………	八
螳螂、蟬を窺う……………	六	焚書坑儒……………	九
螳螂の斧……………	六	へ兵は詭道なり……………	九
虎の威を仮る……………	六	へ兵は拙速を聞く……………	九
虎の尾をふむ……………	六	木鵬……………	二
虎の巻……………	六	亡国の術……………	三
二鶏を割くにいずくんぞ……………	六	法術……………	四
牛刀を用いん……………	六		

庖丁ほうちょう…………… 五

墨守ぼくしゅ…………… 六

奔命に罷るほんめいにつか…………… 七

マまず隗より始めよまいすかいよりはじめよ…………… 七

招かれざる客まねかれざるきやく…………… 六

ム無為にして化すむゐにしてけさす…………… 六

矛盾むじゆん…………… 九

むしろ鶏口となるも、
牛後となるなかれ…………… 九

II 諸子名言

韓非子…………… 二九

戦国策…………… 二九

孟子…………… 三〇

荀子…………… 三四

無用の用…………… 一〇〇

紫の朱を奪うを惡むむらさきしゆをうばふをにく…………… 一〇一

ユ夢に胡蝶となるゆめにこちょう…………… 一〇二

ヨ余桃を啗わすよとうをくわ…………… 一〇三

ル累卵の危うきるいらん…………… 一〇四

ワ「わが舌を視よ、
なお在りやいなや」…………… 一〇五

和光同塵わこうどうじん…………… 一〇五

禍を造して福を求むわざわいをなしてふくをこむ…………… 一〇六

墨子…………… 一五〇

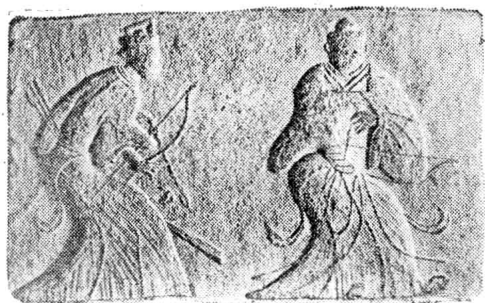
老子…………… 一六〇

列子…………… 一六六

易経…………… 一七五

管子·····	一五	左 伝·····	三四
論 語·····	一四	莊 子·····	三五
孫子・呉子・尉繚子・六韜・三略·····	二四		
Ⅲ 人物小事典·····	二七		
付 春秋戦国年表・地図·····	二六		

I
故
事
成
語



衣食足りて礼節を知る

生活にゆとりができさえすれば、道德意識はおのずと高まるというほどの意味で、斉の宰相管仲かんちゆうのことばとされている。現行「管子」牧民篇には、「倉廩そうりん実つれば礼節を知り、衣食足れば榮辱を知る」と出ている。この対句の上半分と下半分をとって、表題のごとく言いならわすようになった。五輔篇にみえる「公法行なわれて私曲止み、倉廩実ちて囹圄れいぎよ（牢獄）空し」ということばも、同じ発想である。

管仲は孔子が生まれる約九十年前に死んでおり、いわば諸子百家の大先輩に当たるわけだが、みずから宰相となり、現実には政權を担当した点が、他の諸子百家と大いに異なっている。したがってその主張もきわめて現実的である。経済政策のエキスパートであり、農業の保護奨励、塩・鉄・金その他重要物資の生産管理、均衡財政の維持、流通・物価の調整、税制および兵賦の整備などがその主な政策である。かれはまた、士農工商の四民分業定居論にもとづく合理的法制を確立して内政の充実をは

かるとともに、対外的にも適切な政策を実施し、ついに斉の桓公かんこうを春秋覇者の筆頭におしあげた。

この「倉廩実つれば礼節を知り、衣食足れば榮辱を知る」ということばにも、管仲の実際政治家としての見方がうかがえよう。日々の暮らしに事欠く者に礼儀を説いても何にもならないというのである。それよりも君主が財政上の無理をしないこと、それによって民生を安定させることが先決問題である。生活が安定すれば、人民は礼・義・廉・恥の徳を守るようになり、かくして君主の威令は国のすみずみまでゆきわたる。経済の重要性にくらべたら、刑罰など二義的な問題にすぎない。まず民生を安定させ、道德意識を高めること、これが国家存立の基礎である、と管仲は説いている。

「管子」牧民 88

異端

「論語」為政篇にみえる、「異端を攻むるは、これ害ある已」という孔子の言葉にもとづく。

朱子の注によれば、異端とは、「聖人の道にあらずして、別に一端をなすもの、楊墨のごときこれなり」と説

明されている。また、「異端を攻むる」の「攻む」とは、研究することであるとされ、一般的には、異端の説を研究するのは害があるだけだという意味に解されている。

しかし、この章は、読み方によって意味が正反對になる。「異端を攻むれば、ここに害已まん」と読めば、異端と闘争してこそ、その害を根絶できるという意味になるし、また、「異端を攻むれば、ここに害已まん」と読み、異端の説を研究してこそ、害を免れることができるという意味に解することもできる。「異端」という言葉自体、「論語」中に他に用例がなく、本来の意味は確定しがたい。

正統を前提としなければ、今日いう異端の意味は成立しないわけであるが、孔子にどれほど正統派意識があったかは疑問である。

それはともかく、今日われわれが用いる異端の意は、朱子注に由来していることは確かで、異端邪説という言葉があるように、自分と対立する学説、正しくない道という意味に使われ、さらに転じて、時流にいれられぬ思想や学説など、また伝統や権威に反抗するものを意味する場合に使われている。

「論語」為政 四

一毛を抜いて天下を利するも為さず

孟子が楊朱と墨子を比較して、「楊子はわがためにするを取る。一毛を抜いて天下を利するも為さざるなり。墨子は兼愛す。頂を摩して踵に放るも、天下を利するはこれを為す」といったのにもとづく。楊朱の利己主義を「一本の髪の毛を抜けば天下の利益になるという場合でも、決して抜こうとしない」と評したのである。

楊朱は墨子と同時代に生きた、道家に属する思想家であり、極端な利己主義者として知られる。その思想の特徴は、「己を尊ぶ」「物を軽くし、生を重く」することにあり、だれもが髪の毛一本抜こうとせず、天下の利益をはかるうとしないならば、天下は治まると主張した。

あるとき、墨家の禽子という男が楊朱にたずねた。

「髪の毛一本を抜けば社会が救えるとしたら、先生はそうなさいですか」

「世の中は髪の毛一本では救えない」

「もしも救えるとしたらです」

楊朱は答えなかった。弟子の孟孫陽があとで代わりに

説明した。

「髪の毛一本より肌の方が大切だ。肌よりは腕一本の方が大切だ。だが、髪の毛が集まって肌となり、肌が集まって腕となるのだ。一本の髪の毛でも、やはりからだの一部分だ。それを粗末にしていものだろうか」
「わたしには答えることができない。老聃や関尹なら、あなたのことを正しいとするだろう。しかし禹や墨子なら、わたしのことを正しいとするはずだ」

孟孫陽も、もう仕方ないと思ったのか、門人たちのほうをむいて別の話をはじめた。「列子」楊朱篇）
楊朱学派と墨家とが、極端なことを言い合って互いに譲らなかった有様を彷彿とさせるエピソードである。

「孟子」尽心 82 「列子」楊朱 82

一 陽 来 復

冬が去って春がくること、また不遇の時を脱け出してようやく明るさが見えはじめること。

「易経」復卦は、☱☳であり、陰（--）の気がたれこめている中に、陽（--）の気が一つ、萌しはじめたことを

表わしている。陽がふたたび復って来たのだ。しかし、運が向いて来たからといって、急いで飛び出してはいけない。「陽氣盛大になるまで行動をひかえよ」と大象伝では警告している。
「易経」復卦 三

一を聞きてもつて十を知る

孔子の弟子子貢が同門の顔回を評したことはある。
「わたしなど、とても回には及びもつきません。かれは一を聞いて十を知るほどですが、わたしはせいぜい一を聞いて二を知る程度です」

孔子から、「おまえは、回と自分をくらべてみて、どちらが上だと思うね」と問いかけられて、子貢はこう答えたのであるが、この返事に孔子も同感であったとみえ、

「うん、そのとおりだ。じつはわたしも、おまえと同様なのだ」と答えている。「おまえの言うとおり、おまえは回に及ばない」と解する説もある）

顔回は孔子がもっとも愛した弟子として名高い。子貢が大金持ちであったのと対照的に、生涯を通じて赤貧の

うちにあった。年齢は子貢より一つ上で、学識と才能に恵まれ、秀才子貢にとってはよきライバルであったのだろう。したがって、孔子が当の本人をつかまえてこういう唐突な質問をしたのはいかにも残酷で、答える子貢としても、辛いところだったにちがいない。(唐突にみえるのは、ひとつには前後の経緯が記録されていないためであり、このことは「論語」の記録全般に通じていえる)

もつとも、子貢自身は人物評を好んだようである。それが人物評に熱中しているのをみて、孔子は

「おまえは偉いんだね。わたしにはとてもそれだけの余裕はないよ」と皮肉をいつているほどである。(憲問篇)

また、子貢はあるとき、孔子にむかって自分を批評してほしいと頼んだこともある。そのとき孔子は、「おまえは器だ」(「君子器ならず」)したがっておまえは君子ではないの意にもとれる)と軽くないしておいて、子貢が、「どういう器です」と問い返すと、「瑚璉だよ」(器としては最高のもの)と持ちあげた。(公治長篇)

子貢は、孔子より三十一歳年少である。聡明な雄弁家で、「左伝」その他には、かれが外交場裏で大いに活躍した話を伝えている。孔子もその才能を認めていたのだが、時にはこうして皮肉を言わずにはいられなかったよ

うである。孔子が死んだとき、葬儀委員長を勤め、三年の喪があけてから、さらに三年間墓守をしたと伝えられる。人並みすぐれた風格の持主であつたらしく、孔子没後、かれ自身の弟子からは、しばしば孔子以上にみられた。

「論語」公治長篇

鷸蚌の争い

当事者同士が対立しているあいだに、第三者に利を横どりされて共倒れになるのを戒めるたとえである。利をかすめる第三者から見ても、「漁夫の利」ともいう。

鷸は水鳥のシギのことで、くちばしの長さは二、三寸、首もながく、小魚、貝類、昆虫などを食べる鳥である。中国古来の言い伝えでは、天気が雨模様になると鳴くといわれ、春秋時代、天文をつかさどる役人は、このシギの毛を帽子の飾りに使つて天官の職業を表わした。蚌は、淡水の浅瀬に棲息する貝類で、和名のカラス貝に相当する。この故事は、遊説家蘇代(蘇秦の弟)が趙の恵王を説いて燕との戦いを思いとどまらせたときに使った。

易水でカラス貝が砂の上にでていたとき、シギが飛ん